作品解説　感興漫筆

【作者について】

細野要斎は江戸時代後期から明治時代にかけて名古屋を中心に活躍した学者です。要斎は馬術を専門とする尾張藩士、細野家に生まれました。儒学を中心に様々な学問を修め、尾張藩の藩校「明林堂」で教授を務めました。

また学問の合間に各地を巡り、郷土の風俗や民俗資料の収集にも尽力しました。

【作品について】

『感興漫筆』は要斎26歳の天保7年（1836）から死去した明治11年（1878）まで約45年にわたる随筆です。日記形式で表題の通り「感興に赴くままに」日々の出来事が書かれています。寺社などを訪れた際には、見聞した仏像や道中の様子まで詳細に書き記しており、時には明け方まで執筆していたそうです

非常に厳しい性格だったという著者は経験した出来事について忌憚なく批評しており、その詳細に書き記された記録は当時を知る貴重な資料となっています。

『感興漫筆』

細野　要斎

三月二十七日　晴暖、辰中刻頃より独歩門を出、八事山　興正寺　観音の開帳を拝せんと車道より駿河町に出、川名村に至る。大平寺　安阿弥陀（※）の薬師仏開帳あり、大平寺は禅宗　曹洞派　御器所村龍興寺の末寺なりといふ。寺中狭けれども、清潔なり。薬師堂は本堂の西にあり、南面　薬師仏　木像長　壱尺二三寸、塗は新なれども、安阿弥の作信ずべし。坐像、左手玉を掌にし右手垂る、農民の剃髪したるが守り居て鉦を打つ。

本堂の本尊は白衣観音坐像、長　一尺二三寸ばかりなり。位牌堂に永平道元和尚（※2）と此の寺　中興開山の像とを並べたり。

薬師堂を守る僧に、本月十二日、此の寺失火の故を問ふ。曰(いわく)、灰部屋より出たり、弁天祠(べんてんし)のむかえ十三軒焼失す。人いふ、弁天祠は池中に在りて橋なかりしが、今春、橋を架して人を祠(ほこら)に近けたり、その祟りなりといふ。樹木多く焼(やけ)ながら立(たち)たり。（中略）

街道を往事数町(おうじすうちょう)、左折して香積院(こうじゃくいん)に至る。道元禅師真筆一葉(しんぴついちよう)、観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)の開帳あり、堂に登りて見るに帳内(ちょうない)に掛く。その前に正観音(せいかんのん)の木像を置、又その前に木像の一葉観音(いちようかんのん)を置(おき)たり。初(はじめ)は帳内に掲(かか)る開帳(かいちょう)の本尊画幅(ほんぞんがふく)に目及(おぼ)ばず、寺僧(じそう)に問ふてこれを知る。往年見しはこれよりは大(だい)なるを覚(おぼ)ゆ。余が誤認にや。いづれにも開帳ならば、とくと帳を巻き蔽物(へいぶつ)を去り、画(が)容并上(ようへいじょう)に禅師の親書もあれば明(あきら)かに諸人に拝せしむべきを、わづかに面のみをだしたるは、寺僧の心なきを見るべし。

此の寺を出て門前に村家(そんか)の少女が茶を売る。机に坐(ざ)して握飯を喫し、茶を買て飲む、

（中略）

八事山の背より入りて、西山(せいざん)の東、五輪塔(ごりんとう)ある辺りに出(い)づ。山内の詣人遊客(けいにんゆきゃく)袖を連ぬ。西山開帳の本尊聖観音大士を拝し終って下るに、玄関の前にて小銭を引き替ふ。この所にて百銭を引き換へ賽銭とす。旅僧寮(りょそうりょう)の西の間より東へ次第に懸幅(かけふく)を拝し、本堂に至る。本堂の東の間に当山第一の宝物を懸(か)く。

本堂より廊下を経て方丈に至る。この一間、邦君(ほうくん)御歴代(ごれきだい)のご寄付の品を開陳(かいちん)す。瑞龍公の御物(ぎょぶつ)最も多し。欄内(らんない)に入りて熟拝し、略目録(りゃくもくろく)を作る。

拝し終わって小憩し、東門を出、川名の街道にて残れる団飯(だんぱん)を喫し、晡時(ほじ)（午後四時）過ぎて家に帰る。

（現代語訳）

３月２７日、晴れて暖かい。午前８時頃、八事山興正寺観音の開帳を見るため１人で出かけた。

車道から駿河町に出て川名村についた。太平寺で快慶作の薬師仏が開帳されていた。太平寺は禅宗、曹洞宗の寺で御器所村にある龍興寺の末寺だという。寺の中は狭いが清潔だった。

薬師堂は本堂の西にある。南面する薬師仏は木像で大きさは１尺２～３寸（３３cm～３６cm）表面の塗装は新しいが、快慶の作だと思う。座像で、左手に玉を持ち、右手は垂れていた。元々は農民だという僧侶が薬師仏をお守りしていて、鉦を打っていた。

本堂の本尊は白衣観音座像。大きさは１尺２～３寸。位牌堂には永平道元和尚と永平寺を中興した僧の像が並べて置かれていた。

※安阿弥陀：鎌倉時代の仏師快慶。快慶の法号「安阿弥陀仏」から

※永平道元：太平寺が属する曹洞宗の開祖

薬師堂を守っている僧侶に、今月１２日に太平寺で起きた火事について聞いた。

僧によると灰部屋から出火し、弁財天の祠の向いにあった１３軒が焼失したという。

この弁財天の祠は池の中にあり、元々橋が無かったが、今年の春、橋を架けて人が祠に近づくようになった。火事は人が祠に近づいた祟りだという噂があるそうだ。火事で焼けた樹木がたくさんそのまま立っていた。　（中略）

街道を数町（約数百メートル）進み、左折して香積院に着く。道元禅師が描いた観世音菩薩像の開帳があった。

お堂に入ると、開帳される本尊は垂れ幕の内側に掛けられ、その前に観音菩薩の木像が置かれていた。

最初は幕の内にかけて開帳している本尊が分からず、寺の僧に聞いて、どこにあるか分かった。以前見たときはもっと大きかったように思う。勘違いだろうか？

いずれにしても、開帳ならばしっかり幕を巻き上げ、本尊の前には何も置かず、道元禅師の書でも置いてあれば見に来た人が分かりやすいだろうに。

幕の隙間からわずかにしか見えないようにしているのは、この寺にいる僧侶の心配りの無さが垣間見える。

※灰部屋：肥料にするため、かまどから出る灰をためておく部屋

寺の門前で村の少女がお茶を売っていた。机に座って握り飯を食べお茶を飲んだ。（中略）

八事山の裏から入り、西山の東側五輪塔の辺りに出た。境内は参拝に来た人々で混雑していた。西山で開帳されている本尊聖観音菩薩を参拝してから玄関の前で小銭を両替した。ここで百銭を両替してお賽銭に使った。

旅僧寮の西の間から掛けられている物を見学しながら東へ向かい本堂についた。本堂の東の間で興正寺第一の宝物が開帳されていた。

本堂から廊下を通って方丈に至る一間では歴代尾張藩主が寄付した品物を展示していた。徳川光友公ゆかりの品が最も多かった。欄の中に入ってよく拝観し、目録を作った。

拝観が終わって休憩した後、東門から出た。川名村の街道で残った握り飯を食べ、午後４時過ぎに帰宅した。

※瑞龍公：尾張藩の第２代藩主　徳川光友

テキストは、『名古屋叢書　第２２巻　感興漫筆下－２』をもとにして加工しました。